

レーザーコンパス

オリジナリティ・考

服部 秀三*

Shūzō HATTORI*

最近創造性の開発ということが盛んに話題になる。わが国が従来外国技術の導入によって産業が発展を遂げ、あるいは外国で見出された技術を発展させて、わが国で初めて実用に供せられることはあっても、新しい技術が学問がわが国で芽生えることが少ないのは事実である。今や技術や学問に先進性が求められていることについても異論はない。しかし、人間が何かを創造することができるだろうか、また教育によって創造する人間を作ることができるだろうか、という点では私は疑問を抱いている。

人間が何かを考え出す仕方が、人間がそう自覚するであろう程度を遥かに越えて、環境に支配されていることについては、多くの証拠をあげることができるだろう。人間が何かを考えるに当って外からの刺激や内からの刺激に影響される程度が増していることは現代社会の特徴でもある。5次以上の方程式の解の不可能の証明に当って群論を創始した時のガロアのように孤独にたえる学者はもう生れないであろう。

人間のオリジナルな着想が環境に支配される仕方が幾分かでも理解されるならば、これを育てる方策を立てることもできようというものである。工業的な価値を生むような具体的な着想の発生の様式について、以下に経験的に思いあ

たることを挙げてみよう。

新しい着想は第一に価値の意識によって刺激される。解決の方法を知っていて、何に役立つかを知らないことは、まゝあることである。新しい着想は、第二に既に知られていることの整理された知識によって助けられる。約そ可能なことに対する洞察はそのような知識に依存する。新しい着想は、第三に試みる手段に手が届くかどうかによって認知されたものとなることができる。新しい着想はこのような条件の組合せの結果として生れることが多い。

人間の思考は小さな段階を踏んで進むものである。一つのことが頭の中で明瞭な形をとったとき、次の課題が明白な意識のもとに捉えられる。この意味でグループの中の相互の影響は大きい。一つの新しい考えがグループの中で共通な白明のことになったとき、次の新しい着想がそのグループの中で生れる公算は大きい。反対に孤立した人は新しい考えが認められるかどうかという不安のために、次の段階に進むことができ難い。

新しい着想が生れるためには、何といたっても内的刺激が大きな因子となる。着想自体が正しく評価されること。試みの機会が与えられることは、大きな内的刺激の要因であろう。この点

*名古屋大学工学部電子工学教室 (〒464 名古屋市千種区不老町)

*Department of Electronic Engineering, Faculty of Engineering, Nagoya University (Furocho, Chikusaku, Nagoya 464)

でわが国は従来きわめて貧困な環境にあった。知識の組み合わせという点では円熟した研究者が有利であるが、内的刺激という点では若さは大きな利点である。

新しい着想を育てることに伴う大きな困難は経済上の問題である。着想にはお金が掛らないが、それが生れる環境を維持するにはある程度の資金が必要である。刺激に富んだグループと

試みの機会、研究者に対する良い待遇などいづれも資金が必要なことである。限られた資金の範囲で新しい着想を育てる環境を維持するためには優れた研究企画者が必要である。考えてみると今わが国の研究のオリジナリティを向上するには、研究企画要員の養成こそ急務なのではなかろうか。